The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グラウンデッドセオリーと現象学的記述の位相についての一考察
Author(s)	梁, 誠崇
Citation	大阪大学教育学年報. 2007, 12, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5018
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グラウンデッドセオリーと現象学的記述の位相についての一考察

梁　誠崇

【要旨】

本研究は，質的研究法の代表的な方法論の1つであるグラウンデッドセオリーについて批判的検討を行うものである．グラウンデッドセオリーは，誇大理論を相対化し，非理論的性格から出発した方法論としてその適用範囲を広げることができた一方で，方法論としての評価基準を確立していくために，分析技法としては実証主義的性格を帯びるようになった．そのために現象への介入やデータ収集において認識論的課題を残す結果となり，さらに公理論の志向性によって現象の記述性が損なわれる可能性をもつようになった．そこで，近年注目されている社会構成主義的グラウンデッドセオリーや臨床におけるナラティヴ・アプローチの視座を通じて，現象学的記述によるグラウンデッドセオリーの生成可能性を検討した．その結果，現象学的記述が理論との解釈学的循環として布置され，理論の転移可能性に貢献すること，また1つの方法論を認識論的次元から解釈することによっても相互反射的に臨床心理学的研究の実践そのものへの解釈学的循環が生起することが示唆された．

1．はじめに

近年，質的研究法が本邦においても注目されるようになり，質的研究法に関する概説書や各諸技法の解説書も年を追うごとに公刊され続けている．臨床心理学的研究の分野においても，質的研究法は革新的なポストモダンの学問として位置づけられている（下山・丹野　2001, i頁）．質的研究とは，ある現象のプロセスに注目して，帰納的な分析を行い，当事者にとっての「意味」を探る研究を指す（能智　2001, 42頁）．そしてその方法論や技法はエスノグラフィー，グラウンデッドセオリー，ライフストーリー法とあるが，その中でグラウンデッドセオリーは手順の明示性から適用の範囲が広いとされている（能智　2000, 57頁）．しかし，臨床の知を積み上げていく上で，この方法論がどのような貢献を実際に可能にしていくのだろうか．本論では，グラウンデッドセオリーの性質や背景について批判的検討を行いつつ，事例も交えてその記述の意味性について論じる．

2．グラウンデッドセオリーの誕生とその発展

グラウンデッドセオリー[1]とは，アメリカの社会学者であるGlaserとStraussが1960年代に考案された方法論の1つである．データに密着した分析から独自の理論を生成するアプローチとして，社会学にとどまらず，教育学，看護学，心理学にも大きな影響を与え，その現象は「質的研究の革命の先駆者」（Charmaz 2002, 509頁）として位置づけられている．

開発者であるGlaserらが最初にまとまった形でアプローチとしての「グラウンデッドセオリー(grounded theory)」を発表したのは『データ対話型理論の発見：質的調査の戦略（The discovery of Grounded Theory：strategies for qualitative research)』(1967, 訳書1996）においてであった．しかし，この刊行は最初から計画されていたものではなく，すでにモノグラフ（Glaser & Strauss 1965）でまとめられていた研究プロジェクトの副産物として生まれたものである（木下1999, 31頁）．そのモノグラフ『死の認識（Awareness of dying)』において，彼らは1960年代前半のサンフランシスコ湾岸の6つの病院で行われたフィールドワーク，インタビュー調査から，死の情報をめぐるコミュニケーションが，4タイプの「認識文脈（awareness context)」に沿ってある程度構造化された枠組みをもっていることを明らかにした（Glaser & Strauss 1965, 訳書1988）．当時のアメリカでは死をめぐる自己決定について社会的な変革の時期であったが，彼らの研究は現場から得られたデータという特性も相まって，その変革に大きな影響を与えたとされている（澤井　2005, 45頁）．

GlaserとStraussは研究者としての訓練背景は異なる（後にこれが大きな影響を与える）が，彼らの理論的立場は「シンボリック相互作用論（symbolic interactionism)」であった．これは人間間の社会的相互作用を主たる研究対象とし，そうした現象を「行為者の観点」から明らかにしようとするものである．この理論的立場は，現象学やエスノメソドロジーなども包括して，「意味学派」としてまとめられる．こ

の「意味学派」は，一般的にはPersonsらの「社会システム理論」をはじめとする機能主義社会学を対立項として位置づけられている．端的にその対立点を挙げるならば，機能主義社会学がある現象を把握・理解するという行為を研究者側から行うのに対して，意味学派は行為者の立場からそれを行うのである．対立する機能主義社会学の諸理論を「誇大理論（grand theory）」と揶揄し，現場性を重視する意味学派は，不平等の是正と自己決定の擁護を旨とする市民活動に象徴されるような当時の社会的潮流と無関係ではない．その一連の研究では，従来「当たり前」とされてきた制度や行動様式，価値観などが実は社会的に構築されたものであることを具体的に明らかにすることで，主体的存在としての人間のあり方を再認識しようとする基本的傾向性を有していたからである（那須 1997, 100頁）．そうした時代性を背景にして刊行されたのが『死の認識』であり，その社会的かつ学術的な反響も相まって（木下1999, 34頁），それまで機能主義が優先されてきた社会科学の歴史を批判し，方法論に特化した単行本として『データ対話型理論の発見』が刊行されたのである．

木下が指摘しているように，この時点では，グラウンデッドセオリーの方法論的要点は抑えられているものの，既存の社会科学の方法論に関する批判の色合いが濃く（木下 1999, 40頁），実際開発者が問題としていたのは，あくまでも「調査の在り方」（同，47頁）であった．例えば"grounded"の意味，特に"何にグラウンデッドなのか"という問題（Willig 2001, 訳書2003, 61頁）について，『データ対話型理論の発見』では明確に述べているわけではなく，また既存の社会科学の批判をしながら，それに替わる方法論的パラダイムについて認識論的次元から検討しているわけではない．そのために，彼らの事実上の認識論的立場はシンボリック相互作用論であったにもかかわらず，グラウンデッドセオリーそのものは，説明力のある理論的枠組みを構築するためのデータ収集とその分析に関する体系的で帰納法的なガイドラインという非理論的性格として，つまり方法論（methodology）というよりは技法(technique)として，捉えられることになるのである[2]．後にそれは疑問や批判の対象となるものの（e.g. Dey 1999），同時に様々な解釈を，開発者自身も関与しながら展開してきた．

3．グラウンデッドセオリーの戦略的特徴

グラウンデッドセオリーはその非理論的性格であるがゆえに，さまざまな理論的背景を持つ研究者によってグラウンデッドセオリーが産出されていくが，いずれにしても一般的には，グラウンデッドセオリーの戦略的特徴は，以下の6つの項目によって示すことができる．①データの収集と分析の同時進行，②2段階のコーディング（オープンコーディングと選択的コーディング），③継続的比較法，④概念的な分析の構築を目的としたメモ，⑤理論的サンプリング，⑥理論的枠組みの統合，である（Charmaz 2002, 510-511頁）．

それらはあくまで得られた概念を発展させ，洗練させ，それらの相互関係を特定化する方向へと，プロセスを展開していくことが念頭にある．StraussとCorbinによる『質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリーの技法と手順（Basic of Qualitative Research：Grounded Theory Procedures and Techniques）』（1990, 訳書1998, 1998, 訳書2004）では，新たな技術的戦略を組み込んだ規範的で固定的な研究のガイドラインを提示しているものの，第二版では規範性を後退させ，柔軟な論調になっているように，一般的には様式化された手続きというよりも，より柔軟な戦略として位置づけられている（木下 2005, 19-22頁）．つまり，あくまでデータに密着し，概念の発展と理論の生成を目指す思想そのものがこれまでのグラウンデッドセオリーの特質なのであって，そうした思想に基づいた研究成果を形成して，あるいは研究の過程の中から，方法論的枠組みを明示してきたのである[3]．

4．批判と分裂

グラウンデッドセオリーのどの概説書にも記載されているように，開発者であるGlaserとStraussは1990年代になって決別することになる．また，いずれかの立場，あるいはグラウンデッドセオリーそのものへの疑問や批判は現在もなお呈されている．

開発者の決定的な亀裂となったのが，StraussとCorbinによる『質的研究の基礎』(1990) の出版と，対抗してGlaserが『グラウンデッドセオリーによる分析の基礎：生成対強制（Basic of Grounded Theory Analysis：Emergence vs. Forcing)』(1992) の出版であった．Glaserの批判の論点の中核は，分析に対するとらえ方の違いにある．つまり，Straussらが"forcing"，あらかじめ設定している解釈的枠組みにデータを合わせて分析しようとしているが，Glaserが主張するのは，本来のグラウンデッドセオリーにおいて，概念やカテゴリー化というのは，あくまでデータの分析を通じて生成される（emergence）ものであり，体系的で継続的な比較法の使用こそが重要であるとしているのである（Glaser 1992, 43頁）．

Straussの死によってこの論争は曖昧な形で帰着した．グラウンデッドセオリーに肯定的に関心のある研究者も，明確にいずれの学説を正統なものと支持するよりは，グラウンデッドセオリーの使用の際に，便宜的にいずれかの立場の方法論を採用しているという言明に留まるか，そうした事実にまったく踏み込まない（e.g. 戈木　2006）か，あるいは両者の主張を吟味して，折衷的なグラウンデッドセオリーの構築（e.g. 木下 1999）をするかに分かれている．むしろ，StraussとCorbinの方法論に関する読者の戸惑いが結果的に顕在化し（e.g. Robrecht 1995），さらにグラウンデッドセオリーそのものや，開発当時以来の課題が浮き彫りになったといえる．

前述したように，開発者であるGlaserとStraussの研究者としての訓練背景は異なる，というよりも真逆的な関係である．Glaserはコロンビア大学において社会調査法で大きな業績を残したP. Lazarsfeldの下で，計量的，実証主義的社会学の訓練を受けているのに対して，Straussは，社会問題に関して多くのモノグラフを産出してきたシカゴ大学の社会学部に在籍し，後にラベリング理論のH.S. BeckerやE. Goffmanらと共に「シカゴ学派第4世代」として位置づけられる立場である．こうしてみると，先述したような「機能主義社会学対意味学派」の構図をそのまま置き換えられるほど，両者の元々の訓練背景は対照的である．

そうであるにもかかわらず，二人が社会的に影響を与えるようなモノグラフを著し，それまでの学術的なパラダイムに一石を投じるような方法論を構築することができたのは，彼らが実際にフィールドワークを行うにあたって両者の訓練背景に基づく特長をそれぞれ活かすことできたからであると言える．

まずGlaserは，やはりコロンビア大学に在籍していたK. Mertonの「中範囲の理論（middle-range theories)」の影響を受けていた（Charmaz 2006, 7頁）．当時の社会科学における「ミクロ対マクロ」の二項対立下において，Mertonはマクロの立場に位置するPersonsらの一般理論を射程に入れつつ，そうした理論は個別の事例を説明する特殊理論を積み重ねることが必要であると説き，そうした特殊理論としての「中範囲の理論」を提唱したのである．この理論は，マクロミクロ論争の第三の道として注目されたものの，実際にデータに対して体系的に分析する基盤を持っていたわけではなかった（Charmaz 2006, 7頁）．Glaserは，いわばこの中範囲の理論にしたがった体系化された方法論としてグラウンデッドセオリーを位置づけようとしたのである．そして，概念の生成において，実証的でありかつデータとの密着のために特に「理論的感受性（theoretical sensitivity)」を重視し，それにしたがったコーディングシステムを提示したのである（Glaser 1978）[4]．

一方で，Straussはシカゴ学派，特にBlumerやR. Parkの影響を受け，「シンボリック相互作用論」者として，主観的社会的意味は，そこで用いられる言語に依存し，相互行為によって生成されるものとして，やはりシカゴ学派の伝統的な研究法を志向していた．そして言葉によって社会が構築され変容されていくことに敏感であったことから，Straussは，概念化としての命名（naming）やラベリング（labeling）を戦略的に用いたのである．これは，比較法によってデータから概念を"生成（emerging）"させるというGlaserのニュアンスとは異なるものとして理解できるだろう．Glaserと対立後のStraussは，こうした概念化における技法を特性や次元，条件マトリックスとしてCorbinと共に徹底的に規範化していったこ

とからも，Glaserとの違いは明確である．

とはいえ，両者の最初の業績である『死の認識』と，『データ対話型理論の発見』において，両者はその訓練背景に基づく研究や方法論の分担を明確にはしていないものの，Glaserの理論的感受性や比較法，そしてStraussのシンボリック相互作用論に基づく調査フィールドとの交渉や概念化の工夫が絶妙にブレンドしていたことはその後の両者の決別の経緯を鑑みれば明らかであろう．結果的に初期のグラウンデッドセオリーが非理論的性格を帯びるものとして出発したのは，「理論的問題を彼らが十分議論した上でもたらされたというよりは，理論よりは方法論，方法論よりは方法といった表層的レベルでの“合意”の結果なのかもしれない」（木下 1999, 54頁）のであり，当初からそのバランスは危うかったものであることが示唆されるのである．

5．グラウンデッドセオリーのデータ収集上の課題

『データ対話型理論の発見』以後，グラウンデッドセオリーは社会科学の諸領域において質的研究法を代表するまでになったものの，同時に多くの批判を受けている．GlaserとStraussによる初期のグラウンデッドセオリーに対して，すでに認識論上のあいまいさ（Day 1999, 14-17頁）が指摘されているし，Straussに影響を与えたBlummrも，研究者自らが得たデータからカテゴリーが浮上してくるまで，既存の研究や理論的立場を「無視」していることなどできないとして批判している（Blumer 1978）．一般的な質的研究の方向性が「厚い記述」（Geertz 1973）を伴った密度の高いデータの質を求めるものでありながら，グラウンデッドセオリーに関してはデータの分析を重点化しているために[5]，データ収集上の手続き自体に，厳密に方法論として強調されてはいない．また，コード化作業において「データの切片化」を行うことについても，Riessman（1990）は，インタビューされる人を尊重し，彼らの物語（narrative）を描写するには不十分であり，グラウンデッドセオリーの方法は，研究対象者のライフストーリーに見出せる意味について目をつぶっていると批判している．

しかし，実際にモノグラフ化されているようなグラウンデッドセオリーを用いている研究者の多くは，データ収集に関して十分なほどの注意を払っている（Charmaz 2002, 521頁）．先述したように，グラウンデッドセオリーの戦略的特長としてデータの収集と分析の同時進行によって，つまり分析そのものがデータ収集に密接に働きかけているのであり，開発者であるGlaserとStraussも，方法論として強調されていなくとも，理論的感受性を持ち，理論的サンプリングによってデータ収集に十分な戦略や配慮を行っているのは実際にモノグラフに提示されている記述の質的な厚みと，また現象への影響力[6]を見れば明らかであろう．しかしながら，彼らの解説書は総じて分析技法上の問題に焦点化され，データ収集上の実際問題について，十分に扱われていないことも事実なのである．Charmazは，そうした背景が，グラウンデッドセオリーに対する批判を呼び込むのであろう，と指摘している（Charmaz 2002, 522頁）．

こうした批判にこれまでのグラウンデッドセオリーの擁護者はそれぞれの対応を見せている．まずStraussとCorbinの『質的研究の基礎』の第二版（1998）では，第一版以来の実証主義的な性質を保持しつつも，調査者と現象との相互作用性に言及し，概念間の関係性についても強調化されている．すなわち，「理論とは，関係性の記述を通じて関連づけられたよく発展した概念」（15頁）なのである．つまり，それまでの実証主義的な認識論から，幾分か現象学的な視点を取り入れ，明示にしていると言えるだろう．また，本邦でも木下（1999, 2003）はこれまでのグラウンデッドセオリーを折衷的に改良させた修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（M-GTA：modified Grounded Theory Approach）を開発し，その改良点として，データの切片化をしないこと，分析テーマの導入によって，現象とデータの隔離を防いでいる．

しかし，それらの工夫はいずれも限界があると言わざるを得ない．それはデータそのものの性質について，これまでの立場以上の検討がなされていないからである．つまり，いずれの改良においても，解釈学的アプローチを部分的に採用しているものの，その際のデータの性質については言及せず，認識論的次元を深めるまでには至らないまま，方法論としての実証性を高めようとしている．果たして，その“実証性”は実際に高めることはできるのだろうか．

これに関連して，グラウンデッドセオリーに対する批判の1つに，検証性の問題がある．Hammersley

(1989) は，開発者の認識論として影響を与えたはずのシンボリック相互作用論に反しているとしている．つまり，シンボリック相互作用論は，人間行動の創造性と予測不能性（非決定論）を強調するのに対し，グラウンデッドセオリーは，変数間に「強力な決定論的」関係が存在することを前提にしている (Corbin & Strauss 1990, 6-12 頁) からである．実証主義的立場であった Glaser (1992) は理論の検証よりも生成を重視した一方で，Strauss は生成された理論の検証性については十分に可能であると主張しているが，少なくともそうした枠組みは実証主義的なものであり，経験的世界の実在性は，“いま，ここ”のうちに現れ，新しい発見が達成されるにしたがって，たえず作り直されているとするシンボリック相互作用論 (Blumer 1969 訳書 1991, 29 頁) のとらえ方とは相容れがたいのである．Charmaz(1995) は，再現性という観点から，グラウンデッドセオリーはそもそも検証可能ではないと主張している．

既に述べたように，グラウンデッドセオリーの誕生は，当時の客観主義や実証主義的な立場とも言うべき機能社会主義に対する異議申し立てとしての背景を有していた．誇大理論の追随的な検証が社会科学なのではなく，現場に沿って理論を生成し，構築していくべきであると Glaser や Strauss は主張し，質的革命の先駆者として，グラウンデッドセオリーを展開させてきたはずが，その方法論的確立と研究法としての優位性を示していこうとした結果，グラウンデッドセオリーはほとんど実証主義的なアプローチとして位置づけられるまでになってしまったのである (Roman 1992, Charmaz 1995, 2000, 2006)．

そもそも開発者の Glaser らが最初のモノグラフを発表した時点では「グラウンデッドセオリー」という呼称さえつけていなかった[7] ように，彼らが当初意図したのは方法上の手続きの明示ではなく，過去の誇大理論を相対化した方法論の提示にあったということができる．同時にそれまでの質的研究法の訓練が，現象への関わり方について講じられてきた (Charmaz 2006, 6 頁) のに対して，データの分析については名人芸的な扱いのままであった (Charmaz 2006, 木下 1999) ことから，データの分析法についてその手続きを明示できたグラウンデッドセオリーの登場は革新的に位置づけられたのである．しかし，それらはあくまで研究法としての“手段”の明示や確立であって，研究“目的”ではなかったはずである．それにも関わらず，グラウンデッドセオリーという概念が曖昧なまま一人歩きした結果，有効な質的研究法として目的化されてきたように思われる．どのような認識的立場に立とうとも，グラウンデッドセオリーの成立の背景を十分に理解しておくべきであり，調査対象となる現象の関わり方から，調査者はその研究の方法論を吟味した上で，構築し，明示していくべきであろう．

6．第3の道：グラウンデッドセオリーの解釈学的シフト

これまでのグラウンデッドセオリーの系譜からは，認識論の不在，データ収集の相対的軽視という課題によって，盲目的過信から徹底した反発まで多くの反応を生み出してきたことが伺える．ここではさらにグラウンデッドセオリーの特質，特にグラウンデッドセオリーにおける理論やコーディングの意義について論考を深めていくとともに，解釈学的なグラウンデッドセオリーの有効性や，その記述の親和性について述べていく．

6．1 理論化の認識論的意義：臨床における診断の記述と関連して

前節で述べたように，現場に密着したカテゴリーや理論の生成を目指しながらもグラウンデッドセオリーは非理論的性格を持ったことによって，そもそも理論をどのように意味づけるのかについて，調査者

表1　認識論に基づく理論の立ち位置（Charmaz 2006, 125-128 頁を元に筆者が作成）

実証主義的視点	解釈学的視点
・原因論、決定論的な記述	・現象への創造的な理解
・一般性・普遍性を重視	・現象の多様性、不確定性、意味の生成
・変数としての概念の使用	・現象のコンテクストへの理解
・概念間の関係性について特定化、予測化	・洞察、説明力、妥当性のある記述
・システム化された知見	・システムよりプロセスを重視
・調査のための仮説生成	・理論化によって主観の承認
・仮説検証を通じて、理論的関係性を立証する	・理論が交渉、対話、理解の役割を担う

は暗黙の内に捉えていたに過ぎなかった．例えば，グラウンデッドセオリーの解説書によれば，誇大理論への対抗上，先行研究による仮説構成を戒めることから，相対的に先行研究に対する重要度を下げてきていた．しかし現状のグラウンデッドセオリーによる研究の多くに，既存の理論を言い換えたに過ぎないもの，明らかに先行研究との整合性が未検討であるものがあることが指摘されている（三毛 2005, 54 頁）．そもそもグラウンデッドセオリーによるアプローチによって生まれた“理論”が何に基づくのか，それはどのように用いるのかは未検討の課題であるとしている（Chrmaz 2006, 125 頁）．さらにそうした曖昧さはグラウンデッドセオリーに対する批判の1つとしてしばしば取り上げられるものでもあり，その結果，グラウンデッドセオリーをどうやって構築していくのかについての手続きの明示化やその強調化によって対応しようとしてきた（Charmaz 2000, 521 頁；2006, 125 頁）．

グラウンデッドセオリーにおける理論の概念[8]について考える上で，社会科学における認識論に立ち返ってそもそもの理論の定義について検討すべきだろう．表1では，Charmaz（2006）を参考に実証主義的な立場と解釈学的立場のそれぞれから理論のもつ意味についてまとめている．

いずれの認識論がすぐれているか，またグラウンデッドセオリーにおいてより適合的かという議論は生産的であるとは言い難い．それは「質的か量的か」という議論に通底している．Charmaz（2006, 130 頁）は，調査者が自分で論理的に検討し，選択すべきであると主張している．それぞれの立場に基づいた上で方法論を選択することが肝要なのである．

グラウンデッドセオリーにおける理論についてここで検討すべき問題は，その表現の様式であろう．理論を「関係を表す言明によってうまく関連づけられた諸概念．これらは統合された枠組みを形作り，これによって現象を説明したり予測したりすることが可能となる」（Strauss & Corbin 1998, 訳書 2004, 23 頁）ならば，それは実際にどのような表現によって達成されるだろうか．

一般的には帰納的研究法として位置づけられる以上，論文において「結果」に相当する部分が生成された理論ということになる．具体的には，ストーリーラインや結果図（Willig 2002, 木下 2004）がその理論の端的な説明として理解されるだろう．例えば木下によれば，「概念説明的記述」か「現象説明的記述」に分けて，それぞれ一長一短があることを示している（木下 2004, 240-242 頁）．しかし，Strauss と Corbin 版にいたっては，初学者がその違いを理解できていないことを強調した上で，理論と記述を厳格に区分している（Strauss & Corbin 1998, 訳書 2004, 23-35 頁，344-345 頁）．全体を通じた文脈を読む限り，Strauss らが主張している「記述」というのは木下版で言う「現象説明的記述」に相当することが示唆されよう．Strauss らの立場に従えば，理論は，データから生成された概念（あるいはカテゴリー）を整理し，構築化していくことで，さらに「その他の現象を説明する理論的な枠組みを形成する」（Strauss & Corbin 1998, 訳書 2004, 31 頁）ために，抽象度を上げていく．最終的にそれがフォーマル理論として醸成されるわけだが，果たしてそれは本来の調査対象であった現象を的確に把握していたことになるのだろうか．Strauss らもそうした理論の次元を上げていくことで「もともと関係のあった生のデータからはどんどん離れていってしまう」（Strauss & Corbin 1998, 訳書 2004, 32 頁）ことを認めているが，その理論の現場での利用可能性や妥当性の検討はなく，あくまで公理論への志向を示すのみである．

確かに，歴史的には質的研究の評価基準としての研究の信頼性や妥当性は常に問われ続けてきた課題であった[9]．その1つの方略として「転移可能性」（Lincoln & Guba 1985）という概念が提出されており，この考え方は質的研究に対して過剰な悪意がない限りは，その有効性は認められていると言えるだろう．問題は，グラウンデッドセオリーの方法論に基づいて Strauss らが志向するような一般化（つまり公理論化）に向かう際に，例えば事象 A で実行された概念化によって生成された理論が，近しい概念間関連を示したと調査者が判断（さらに Strauss らの立場に立てば，調査者は外部の観察者として位置する）した事象 B に適合する際に，果たしてただ抽象化すればよいというものだろうか．そしてそうした抽象化の作業の繰り返しの結果得られた理論が，それぞれの事象を説明する際にどれだけの説得力をもつものだろうか．

このジレンマを論考する際に想起するのは，臨床における診断行為の問題である．臨床心理学や精神医学の分野では馴染みの深い DSM（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders）によって，項目化された基準を所定の水準に満たした上で，診断分類が確定するという，統計学的な根拠を持ちながらも，使用者にとっては自動的な分類化がなされている．それによって，診断行為による記述は安定性や

伝達力を獲得し，妥当性をもつ一方で，目の前の他者（患者，クライアント）の描写は再現不能となる（樽味 2006, 65-66 頁）．こうした戸惑いは，臨床に携わり始めた訓練生特有の，安易な感傷やヒューマニズムとして片付けられるものではないはずである．むしろ，エビデンス（evidence）かナラティヴ（narrative）か，という臨床の知としての枠組みの根幹を見直す重大なパラダイム間の衝突とも言えるだろう．

ここで筆者は，過剰なエビデンスを嫌悪し，ナラティヴこそがその人の有り様を真に迫るのであるというような主張をするわけではない．それこそ他者性を獲得し得ない訓練生の逆転移的な吐露に過ぎないだろう．そうではなくむしろ，ナラティヴの立場に拠ってもなお，その人の有り様を正しく示すことに不可能性を実感せざるを得ない．しかし，その不可能性ゆえに記述という行為を例えばStrauss らのように排除するのではなく（というのは，エビデンスもまた記述であり，先に述べたようにその人の有り様を示す上で途方もなくその限界性と不可能性を痛感するからである），それを認めた上での“意味のある記述”の可能性を探る必要性を感じるからである．逆に，その不可能性に満ちているはずの“記述”がどのようにして現象の全体性を照射することができるのか，その可能性の検討をすべきであり，同時に理論としての価値生成につながるのではないだろうか．

6．2 Charmaz の社会構成主義的グラウンデッドセオリー

“記述”の可能性の検討の前に，こうしたジレンマの1つの解決的方略としての社会構成主義的グラウンデッドセオリーを取り上げておきたい．それは，これまでの古典的なグラウンデッドセオリーと異なり，カテゴリーや理論がデータから単独で生ずるものではなく，データとのやりとりを通して研究者が構築するものであるという立場である（Charmaz, 1990, 1995, 2000, 2006）．このアプローチは，「調査対象である現象を優先し，データと分析は両方とも研究者と調査対象者との関係性，またそこで共有された経験によって生み出されたものとしてとらえるのである」（Charmaz 2006, 130 頁）．これまでならデータの中でその法則性を導き出し，理論を発見することがグラウンデッドセオリーの目的であったのが，「データとの相互行為によって，研究者がデータについて抱いている考えを発見する」（Charmaz 1990, 1169 頁）ことが目的となるのである．研究者はフィールドに参入する前に自分自身の認識論やフィールドに対する先入観を認め，それがリサーチクエスチョンから研究のどのプロセスにおいても影響を与えるものとみなされる．これまでの誇大理論や古典的なグラウンデッドセオリーにおける本質主義から社会構成主義的な相対主義的にシフトして，生成される理論もデータに基づく唯一の真実ではなく，研究者自身もそこに組み込まれる形で，データに対する部分的な1つの解釈の提示を行うのである（Charmaz 2006, 131 頁）．

Charmaz がこれまで著してきた解説書（1990, 1995, 2000, 2006）によると，この社会構成主義的グラウンデッドセオリーの方法としての手続きは，図1にまとめられることができる．技法的にはこれまでのグラウンデッドセオリーの系譜と比べると，メモ書きの質的違い，理論的サンプリングの適用基準に違いが見られ，全体としてはより柔軟で単純化された手続きを提示している．

それ以上に Charmaz 版の特長としては，現象への関心や問いを焦点化にあるだろう．社会構成主義的グラウンデッドセオリーにおける問いの生成はこれまでの他のグラウンデッドセオリーとは性質が異なる．表2では，これまでの立場ともいうべき実証主義的グラウンデッドセオリーと社会構成主義的グラウンデッドセオリーでの，それぞれの問い（リサーチクエスチョン）の方向性の違いについて形式を挙げながら示している．これに基づくと，Straus と Corbin 版のような実証主義の立場であれば，特性や次元マトリックスにしたがった質問形式になるであろう．問題の在処を示し，体系化し，対処方略の同定を意図していることがうかがえる．これを問題解決的視点と定義づければ，対照となる社会構成主義的な立場では，対象に属する主観的な意味構築的視点と理解することができる[10]．

この意味構築的視点をもちながらも，Charmaz 自身は，「これらの問いによって，Straus や Corbin ンと共有している問いへとつながる」（Charmaz 2000, 524 頁）としている．つまり，対象（者）の経験の理解である．結果として，それは同質の帰着の可能性を有しつつも，社会構成主義的グラウンデッドセオリーでは経験の真実よりも意味を重視するのであり，その描写はより「直感的で印象的」（Charmaz 1995, 27 頁 , 2006, 149 頁）であることを可能にするのである．

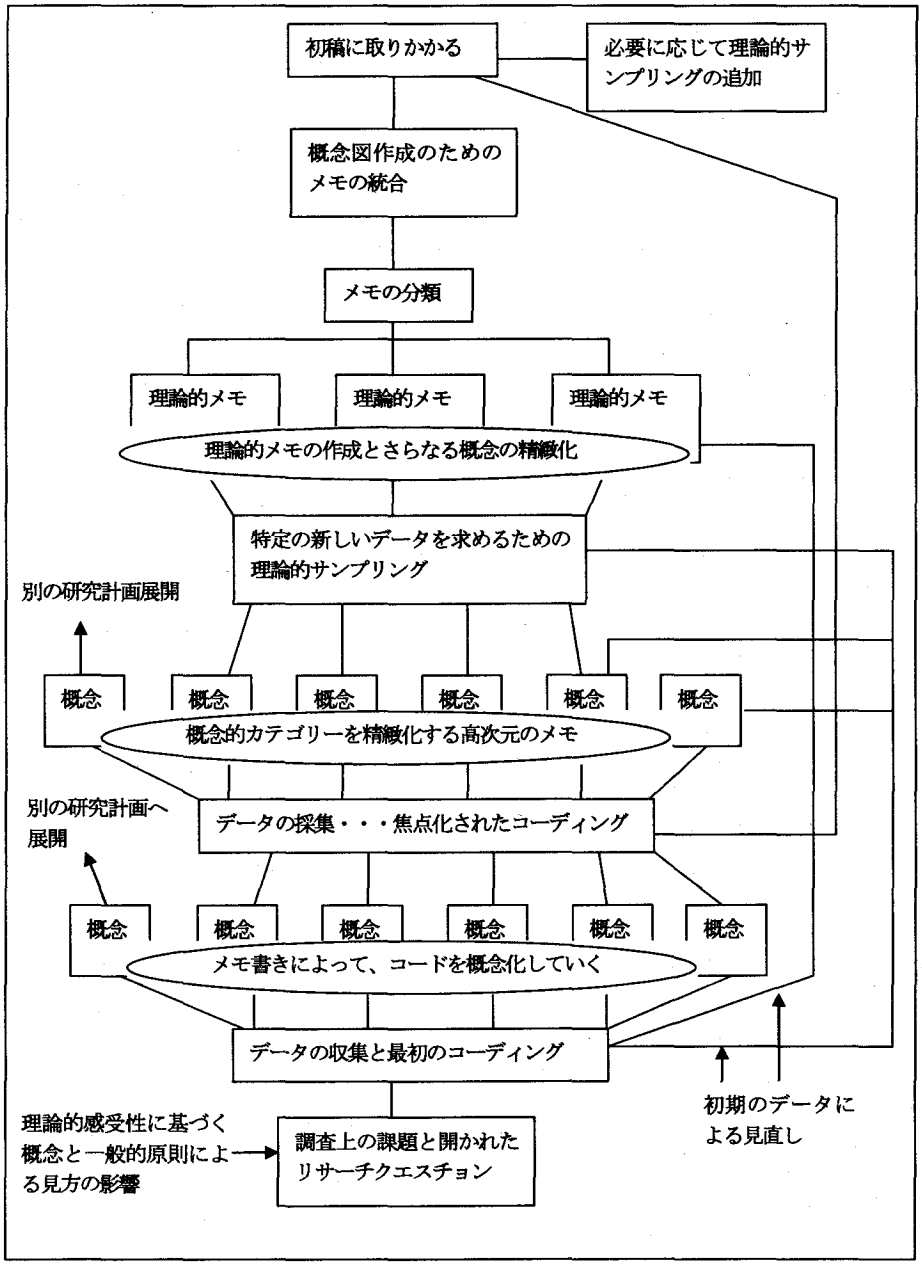

図1 社会構成主義的グラウンデッドセオリーのプロセス（Charmaz 1990, 2006 から筆者が一部改変）

Charmaz のこうした主張は，もはやこれまでのグラウンデッドセオリーとは根本から異なり，ほとんど解釈学的，現象学的であることが伺える．『良き日々，悪しき日々（Good Days, Bad Days）』（1991）において Charmaz が注目したのは，慢性疾患患者の容易には語り得ない経験であった．「私は人々が取った行為を取り上げるわけだが，そのカテゴリーの中身は，私がそれらの行為をどのように構築して，私が対象者の言明や行為に与えた感情や解釈をどのように理解するかによる．私が暗黙の意味を掘り下げようとしたとき，私たちの会話の中でその相手が誰であっても同じように自分たちの描写に関して熟練していた

り，行為を意味づけられたりするわけではない．だからこそ，調査者は，特別な方法論ではなく，関連のある意味や行為を学ぶための分析的な戦略を展開させていくべきなのである」（Charmaz 2006, 148 頁）．そのジレンマへの対応として，継続した，複数回にわたる対象者との関わり（インタビューも含まれる），身体の在り方など非言語的側面をデータに組み込むこと，また得られた in-vivo 概念を異なる経験をもつ他者に呼び込むことで，「暗黙の意味の幅を明らかにしていく」（Charmaz 2006, 148 頁）戦略をとった．他のグラウンデッドセオリーの系譜と異なり，理論的サンプリングを後半に重点化するのも，それらの影響がある．さらには，「対象者が詳しく語れていない内容は，会話の流れの中で突然起こるような，裏付けられない余白に残っている」とし，注目していた．こうした手続きによって生み出されたグラウンデッドセオリーは，他の研究者のグラウンデッドセオリーと比較すると，明らかな違いを見出すことができる．そこでは，生成した概念は，それ自体では理解しにくい抽象的な命名が多い（「1 日ずつ生きる」や「弁証法的な自己」など）一方で，抽出される語りは非常に具体的である．さらに，慢性疾患をもつ人にとっても病の経験に 3 つの類型を見出したが，その類型化以上に注目されるのは，それらが自己や時間に関する異なった経験と結びついているところにある（Charmaz 1991）．それらは慢性疾患でなくとも，人間が人生の節目や局面で共有できるものであり，つまりはそうした他者の主観的経験，特に人生や生活に関わる自己のとらえ方が余儀なく変化させられるとき，過去，現在，未来という時間が個人にどのように立ち現れてくるかを理解することが，その人の経験の有り様をとらえる上で重要な手がかりになることを明らかにしたことこそが，Charmaz 版グラウンデッドセオリーの優位性なのである（上記の要約と先の『死の認識』に関する記述を対比すれば明らかである）．Charmaz の時間や自己の概念に基づくエピソードの記述は，間主観的であり，現場の語りがありのままに伝わってくるであろう．それは，セオリーが調査者自身の主観から逃れることができないとしながらも，同時に対象者のナラティヴを主体とし，さらに調査者が，主観である調査者自身を観察できる複眼的な視点をもっているからと考えられるのである．

表 2　実証主義的グラウンデッドセオリーと社会構成主義的グラウンデッドセオリーでのリサーチクエスチョンの違い（Charmaz 2000 より引用）

実証主義的グラウンデッドセオリー 問題解決的視点：Strauss & Corbin（1990）	社会構成主義的グラウンデッドセオリー 意味構築的視点：Charmaz（2000）
・「誰が痛みを軽減させるのか」 ・「何が痛みを軽減させるのか」 ・「どのように痛みは経験・対処されているか」 ・「どのくらいの痛みに、軽減の必要があるか」 ・「いつ痛みが起こり、いつ痛みが軽減するか」 ・「なぜ痛みを取り除くことが重要なのか」	・「痛みを痛みにしているのは何なのか？」 ・「病む人は、何をもって痛みの特性や特徴を意味づけているものなのか？」 ・「病む人は、いつそれを行うのか？」

6．3 ナラティヴとしての現象学的記述

しかし，Charmaz が意図するような現象学的なエピソードの記述の様式が，これからのグラウンデッドセオリーにおいて“一般化”することは可能なのだろうか．木下（2003）は概念説明的記述と対比させ，「分析焦点者を中心とした行動や認識，他者との相互作用に関する内容」となり，分析焦点者を中心に全体として現象がうごきとして述べられていくので，読みやすくなる」（241 頁）ものの，その重要性について十分に踏み込んでいるとは言い難い．

エピソードを記述することの意義は，鯨岡（2005）の言葉を参考にすれば，「図と地」の浮上にあると言えるだろう．つまり，エピソードという「図」の確かさによって，同時に反転する「地」の在処もまた確かとなり，個別的であると収束されがちなエピソードに公共性を付与することができるのである．調査者は自分の相手の様子に触発されて生まれた主観的イメージに落とし込まず，相手の主観内容についての間主観的な把握に重きを置き，そして記述においては，受容者である読み手にも了解可能性に開かれなければならないのである（鯨岡 2005, 41-50 頁）．これは解釈学の立場なら「解釈学的循環」（Cohen 2000, 訳書 2005, 106 頁）として定義される．図と地が相補的な関係であるように，現象の部分と全体は相補的に

分析される，つまり弁証法的なプロセスを辿ることによって，相互反射的認識を高め，さらなる弁証法的検討をもたらすのである．

樽味(2006)は記述の虚構性を実感しながらもなおも“誰かを記述する”という営みに,「記述させてもらっている」という感触を取り上げ，その際に生起する「内省の促し」によって,「記述されつつある＜他者＞に対して抱く相互作用の感覚は，たとえ双方の間に虚無の深い溝があったとしても，それでもなんとなく繋がっているかのような感覚をもたらす」ものととらえている(樽味 2006, 66-67 頁)．樽味はそこに「義」の視点を取り入れることによって，両者の繋がる感覚を保たせようとする．＜私＞と＜他者＞は，互いに記述の営みにおける虚構性を知りながらも，そしてそれが時に安心感を伴いながらも，その自覚によってこそ，＜私＞の記述への姿勢が磨かれる可能性をもつことを指摘しているのである（樽味　2006, 69 頁)．

臨床実践の中から樽味が記述の不可能性を着想したように，これらの現象学的記述は臨床心理学的実践としてのナラティヴ・アプローチを照射する．臨床家が虚構性を包含しつつも記述の中で他者のありようを作り上げていくように，他者の語り（ナラティヴ）自体もまた，一回性の連続によって，自己を作り上げていく．ナラティヴ・アプローチにおいては，定型化された物語（dominant story）からオルタナティヴストーリー（alternative story）への移行が，語り手としての自己と聴き手としての他者の承認によって達成され，それよって語り手の痛みを緩和し，主体性を生みだしていくのである（野口 2002)．それは本質論的な枠組みとは異なる，まさに発見ではなく，相互的な関与によって構成されるものとして，語りとは作り上げられていくのである．そして，調査者や臨床家はその現象を認め，記述する（あるいは記述させてもらう）営みへと連綿していくのである．そしてそれらの記述が，理論（誇大理論ではない，グラウンデッドセオリー）との解釈学的循環によって，公共性や意味性をより確かなものとして帯びていくのではないだろうか．

・エピソード：自殺遺族のサポートグループの運営者のナラティヴ

グラウンデッドセオリーを用いたサポートグループの実践的モデル構築の研究（梁 2006）の過程で得た，自殺遺族のサポートグループの運営者のナラティヴを取り上げてみよう．自殺や病死によって家族を全員失って，自らサポートグループを立ち上げた女性 T さんのインタビューでのエピソードである．

グループの立ち上げ当時, T さんにとってその意味とは「生きていくために残された唯一の手段」であったことを語っていた．その後 1 年近く経ち，現在のグループを続けることの意味を直接的に尋ねた時,「そんな刹那的なことではなくて，とても自分自身ハッピーにすることだったんだな」と思うようになったという．その時，彼女は婚約中の男性（この男性は，彼女がグループを立ち上げた当時から裏方として支え続けていた）との関係に触れ,「多分この会をやっていなければ，ある程度ふたをして，お互い触れないようにして，問題をやり過ごして，生活をしようと思うので，多分こんなにスムーズにはいってなかったと思うんですね，人間関係とかが．だから自死遺族ケアという事じゃなくて，私自身人生全体，それがその生活全体の，なんかこうメンテナンス（笑う），のようだ，ったかな，って思いますね．良い風に，メンテナンスされて，いい感じで機能されてるんで，人生が」これを聞いた私[11]は，毎回寡黙ながらも人を和ませる佇まいで（その様子は，T さん自身が語ったものでもある），グループの受付を行う婚約者の男性の姿を思い起こし, 胸が熱くなったことを感じて, 思わずこう述べた.「だいぶ, なんか広がったなあ, と. なんて言えばいいんですかね，うまく言えないんですけど，広くなったなあ，って．いや意味がわからないんですけど」恥ずかし紛れに笑う私と一緒に T さんも笑う.「いやあ，なんで，こんなに広くなったんでしょう？」.「広くなった」という私の問いかけは私自身の中で生起した言葉に過ぎず，質問として本来不適格であると感じながらも，T さんはニコニコしながら「なんで広くなったんでしょうねえ・・・個別なところでいうと，細かい話をすると，遺族会というのはしゃべるだけですよねえ．しゃべるだけで，それはそれで 1 つできなかったことができるようになった．自分のことを語る，自分の思いと向き合う，亡くなった人のことを思い出す．1 人ではなかなかできないことなんですよ，私自身がね．あとは，えっと，グループの中で遠足の会をやったんですけど，メンバーで，食べる，って楽しい，うん，あ，おいしいんだ，

食べるということが．みんな手間暇かけてご飯をつくって食べる，外で，むちゃむちゃ作って食べきれないほどだったんだけど，楽しいんだな，これが」．

私とTさんの出会いは，このインタビューより1年近く前の自殺遺族支援をめぐるワークショップにおいてであった．その場のTさんには，どこか攻撃的な雰囲気を感じ，筆者は少し近寄りがたさすら感じていた．しかし，その翌年からボランティアもかねて調査としてTさんのグループに関わることを認めてもらい，その中でいきいきとしているTさんの様子は，私がその前年に見ていたTさんの印象とは大きく異なるものであった．私の印象が誤りでないのなら，単に身内的なグループの居心地の良さだけなのか．そうでもないのなら，一体何がそうさせているのか．

そうしてTさんとの出会いは，私の予想や期待とは少し異なるものとなった．確かに，グループを身内意識として捉えている，という見方がまったく的はずれであるとは言い難いかもしれない．しかし，だからといってそれが的確に表現しているとも言えないだろう．むしろ，その表現に自殺遺族やサポートグループに対するステレオタイプ（自殺遺族の攻撃的心性，閉塞的空間としてのグループなど）を潜ませていないだろうか．Tさんが私に伝えたかったことは，そうではない，別の物語ではなかったか，と私は感じている．Tさんが志向した遺族同士の「出会い」から，さらに広い概念としての，様々な生きることへの「出会い」という転換を，私は「広くなった」と感じ，その主観的な投げかけが，他者であるTさんにとっても了解可能なものとして，さらに個別の「出会い」を語ってくれたのである．

このエピソードにおいて，鯨岡（2005）の主張する間主観性の相互関係は，「広くなった」というキーワードを通じて形成されていく様子をうかがい知ることができるだろう．筆者の修士論文（梁 2006）では，こうしたエピソードを背景にして，いくつかの概念生成に結びつけ，その後の理論的サンプリングの段階において，サポートグループの運営者としての体験を時間軸的に追跡することを試みたところ，それぞれの活動の中で，自己や喪失体験や“遺族支援”という現状に対する意味づけを変えていく様子が描き出された．そして，このエピソードのもつ意味もまた，定型化された物語からオルタナティヴストーリーへと，様々な構成要素を分解しながら，開かれていく現象として，その重みを確かなものにしていくことができるのである．

7．おわりに

本論では，グラウンデッドセオリーにおける理論の枠組みにおける現象学的記述が，理論の公共化を曖昧にするものではなく，むしろ解釈学的循環によって，弁証法的検討を深めていくことができるものとして位置づけた．そしてその記述とは，客観的ではなく虚構性や不可能性に満ちたものであることを認めることから出発し，間主観性を構築していくための対話が不可欠であることが示唆された．

最後に我々が特定の質的研究の方法論（ここではグラウンデッドセオリー）を学ぶことの意義について論ずる．

グラウンデッドセオリーは質的研究法の代表的な方法論として確立されるようになった一方で，その方法論の確立のプロセスにおいて実証主義的戦略がとられることによって，かえって多くの批判と誤解を招くようになった．現実に多くの質的であると分類される研究において，グラウンデッドセオリーを，調査者の認識論や，研究上の戦略によって部分的に，あるいは微調整しながら用いられるものである（佐藤 2002, Cohen 2000）．その方法は，定型的であろうとするよりは，明示性が保ちながら，柔軟に扱うべきなのだろう．無論，その柔軟性とは，調査者の恣意性に基づくものではなく，現象の記述の豊かさやありのままさを保証するための，現場や対象者との対話による相互行為の帰結としてとらえるべきである．つまり，規範化された方法論に固執するのではなく（それ自体を誇大理論として照射することもまた可能であろう），それ自体の徹底的な比較や感受性を高めていくことによって初めて，特定の方法論から出発することに意義があるのであり，臨床心理学的諸現象に携わる行為者としての発達が促進されていくものと考えられるのである．そこでは，前節において示した，全体と部分の相互反射的な解釈学的循環関係とし

て捉えることができるだろう.

<注>

1）"grounded theory"に対する訳語は実際のところ訳者によって異なるが,「グラウンデッド（・）セオリー」と訳すのが最近の傾向であること，また訳者の価値判断をなるべく含まないようにする判断から，本訳語を採用した. また,グラウンデッドセオリーとグラウンデッドセオリーアプローチ(あるいはグラウンデッドセオリーメソッド）は厳密に分けておくことを主張している研究者もいる．これについては本文でも取り上げているように方法論と技法を区別すべきであるという考えがうかがえる. 本稿は方法論としてのグラウンデッドセオリーの批判的検討である(その中には技法として規範化することに対する批判でもある)ため,基本的にグラウンデッドセオリーとして表記している.

2）Corbinらは，シンボリック相互作用論に立脚していなくてもグラウンデッドセオリーを用いることは可能であると主張している(Corbin & Strauss 1990, 5頁).

3）しかし，多くの質的研究者が，自身の研究を正当化するためにグラウンデッドセオリーの使用を標榜しているという指摘もある（Charmaz 2000, 509頁）．本邦でも，近年のグラウンデッドセオリー研究の増加によって概念の粗製乱用の指摘がある（三毛　2005, 54頁）.

4）理論的感受性にしたがって,体系化されたコーディング体系は18の次元がある．6つのC,プロセス,程度,次元,タイプ，方策，相互作用，アイデンティティ・自己，切断点，手段・ゴール，文化，コンセンサス，メインライン，理論，整理，ユニット，読書，モデル（Glaser 1976）.

5）例えば「理論的サンプリング」や「理論的感受性」は現場への参入やデータ収集における戦略的技法として位置づけることができるものの，あくまでデータ分析上の実証性や妥当性を高めるための必要な特性として挙げていたとみなすことができる.

6）澤井（2005）は，1970年代以降アメリカでがん告知率が高まったのは，Glaserらのモノグラフの影響が大きいことを指摘している.

7）『死の認識』(1965）において，現在のグラウンデッドセオリーに対応する用語としては"具体的理論"(substantive theory）の記述がある.

8）理論のレベルとしては，ミクロなのかマクロなのか，あるいは中範囲の理論（Merton）なのかという議論も当然ながら想定される．グラウンデッドセオリーに関しては，認識論的次元の立場を超えて見解が統一されているとは言えない．ミクロ理論として位置づけている立場もあれば，マクロとして認識する立場もある．筆者としては開発者であるGlaserの志向を受けて中範囲の理論として理解可能であると捉えているが，グラウンデッドセオリーとフォーマル理論との関連なども考慮すると，可塑的に捉えるのが無難であると言える.

9）質的研究の信頼性や妥当性に関する議論については，サトウ（2004）が整理し，提言しているので参考になる.

10）Charmazにとってのグラウンデッドセオリーにおいて,そのプロセス性の明示はもちろん包含されているものの，どちらかといえば当事者の経験の意味に焦点を絞っている．また一般的な社会構成主義的研究アプローチとして，エスノメソドロジーが主流であるとされる．それにも関わらず，Charmazはそうした方法論よりもグラウンデッドセオリーを優位に捉えている（Charmaz 2000, 530頁）．Charmazの主張を突き詰めれば，それは限りなく伝統的な現象学の立場とあり，もはやグラウンデッドセオリーとみなすよりは異なる別の方法論となってしまうかもしれない，という指摘もある（Willig 2001, 訳書2003, 頁）.

11）本来論文における一人称に"私"という表現は適切であるとは言い難い．しかし,修士論文（梁　2006）でも述べているように，現場の出会いに関する記述は筆者である"私"を含んだ諸要素の相互作用によって構成されるはずであり，"私"を除外して客観的に構成されるものではあり得ない以上，"筆者"という疑似客観的な表現は適切であると考えられないのである．これについては樽味（2006）も同様の見解を述べている.

<参考文献>

Blumer, H. 1969　後藤将之訳『シンボリック相互作用論ーパースペクティヴと方法』頸草書房，1991.

Blumer, H. 1978 "Social unrest and collective protest", in Studies in Symbolic Interaction, vol.1, ed. by N. Denzin, Greenwich: SAI Press..

Charmaz , K. 1990 "Discovering chronic illness：using grounded theory", Social Science and Medicine, vol.30, No.11, pp.1161-1172.

Charmaz, K. 1991 Good Days, bad Days：The self in chronic illness and time. New Brunswick：Rutgers University press.

Charmaz, K. 1995 "Grounde Theory", in Rethinking methods in psychology, eds. by J. A. Smith, R. Harre, & L.

Van Langenhove, London, Sage, pp.27-49.
Charmaz, K. 2000 "Grounded theory : Objectivist and constructivist methods",in Handbook of Qualitative Research, eds. by N. K. Denzin & Y. S. Lincoln, Thousand Oaks, Sage, pp.509-535.
Charmaz, K. 2006 Constructing grounded Theory : A Practical Guide Through Qualitative Analysis,Sage.
Cohen, M. Z. , Kahn, D. L. & Steeves, R. H. 2000 大久保功子訳『解釈学的現象学による看護研究：インタビュー事例を用いた実践ガイド』日本看護協会出版会，2005.
Corbin, J. & Strauss, A. L. 1990 "Grounded Theory Research : Procedures, canons, and evaluative criteria", Qualitative Sociology, vol.13, No.1 pp.2-21.
Dey, I 1999 Grounding grounded theory : guidelines for qualitatibe inquiry, San Diego : Academic Press.
Flick, U. 1995 小田博志・小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門：「人間の科学」のための方法論』春秋社，2002.
Glaser, B, & Strauss, A. 1967 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見一調査からいかに理論をうみだすか』新曜社，1996.
Glaser, B 1978 Theoretical Sensitivity : Advanced in the Methocology of Grounded Theory, Sociology Press.
Hammersley, M. 1989 The Dilemma of Qualitative Method: Herbert Blumere and the Chicago Tradition, London: Routledge.
木下康仁 1999『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂.
木下康仁 2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.
鯨岡 峻 2005『エピソード記述入門：実践と質的研究のために』東京大学出版会.
Lincoln, Y. & Guba, E. 1985 Naturalistic inquiry, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
Lonlila, M. 1995 "Grounded Theory as an emergingparadigm for computer assisted qualitative data analysis", in Computer-Aided Qualitative Data Analysis: Theory, Methods and Practice, ed. by U. Kelle, London : Sage.
那須 壽 1997『現象学的社会学への道：開かれた地平を索めて』，恒星社厚生閣.
野口裕二 2002『物語としてのケア：ナラティブアプローチの世界へ』，医学書院.
能智正博 2000「質的（定性的）研究法」下山晴彦編『臨床心理学研究の技法』，福村出版，56-65 頁.
Robrecht, L. 1995 "Grounded Theory: evolving methods", Qualitative Health Research, vol.5, no.2, pp.169-77.
Roman, C. 1992 "The reflective self through narrative: a night in the life of an erotic dancer/researcher", in Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience, eds. by C. Ellis and M. Flaherty, California: Sage
戈木クレイグヒル滋子木 2005『ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生みだすまで』，新曜社.
佐藤郁哉 2002 『フィールドワークの技法：問いを育てる，仮説をきたえる』，新曜社.
サトウタツヤ 2004「心理学から質的研究」『学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ（立命館大学）』7巻，3-43 頁.
澤井 敦 2005『死と死別の社会学 社会理論からの接近』青弓社.
下山晴彦・丹野義彦編 2001 『講座臨床心理学２ 臨床心理学研究』，東京大学出版会（分担執筆者として能智正博「質的研究」41-60 頁）.
Strauss, A. L. & Corbin, J. 1990 南裕子監訳『質的研究の基礎：グラウンデッドセオリーの技法と手順第２版』医学書院，1999.
Strauss, A. L. & Corbin, J. 1998 操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎：グラウンデッドセオリーの技法と手順第２版』医学書院，2004.
樽味 伸 2006『臨床の記述と「義」：樽味伸論文集』，星和書店.
Willig, C. 2001『心理学のための質的研究入門：創造的な探求に向けて』上淵寿・小松孝至・大家まゆみ訳，培風館 2003.
梁 誠崇 2006 『自殺遺族をめぐるサポートグループの実践的モデル構築の試み』大阪大学人間科学研究科平成17年度修士論文，未公刊.

A Study of Grounded Theory and the Phase of Phenomenological Description

YANG Masataka

This study critically reviewed the "grounded theory," which is a typical methodology in qualitative researches. While the grounded theory differed from the "Grand Theory" and expanded its range of application as a method with a non-theoretical nature so as to establish the criteria for evaluation in methodology, this analytical technique has taken on the nature of positivism. However, it has brought up epistemological issues regarding the method in which a researcher participates and collects data pertaining to a phenomenon. Moreover, when seeking to formularize the theory, it is possible to impair the thick description of the phenomena.

This study aimed to reveal a phenomenological description of the grounded theory by combining the constructing grounded theory and the narrative approach. It revealed that a hermeneutic circle for phenomenological description and grounded theory was produced, thus contributing to their transferability. Moreover, the study observed that the circle is achieved when methodology is understood in an epistemological dimension, creating a link between the method and the study in which it is being applied.